

勇者は懼れず

仲條立一

日本歴史未曾有の敗者として裁かれた時、昭和二十二年五月一日石原は東京裁判の参考人として山形県酒田市商工会議所に設営された臨時法廷に立った。

この第一日目の証言を終えた後宿舎の酒田ホテルでは内外記者団と石原將軍の会見の場がもうけられてあった。

私は偶然にもこの千載一遇とも言うべき好期に巡り合わせをもった。

その思い出は冒頭（君達、私のこれから話す事は貴方達のお国に帰ってから発表して貰いたい。日本で発表すればマッカーサーの検閲で真実が通じなくなるだろうから）と言われた言葉から始まったのと、内外記者達がお互いに頷きあいその通りという意思表示をしていたのだが記憶に焼きついている。

これを手始めにその後1時間位、内外記者団とのやり取りは敗戦国民が口にしたくも慮かれる言葉だった。だが、戦後豹変した指導者を身近に見た私にとっては胸の透く思いだったし、東京裁判の過程を見聞きしてきた記者各位にしては最も痛快な思いをした事は以後の文献によっても明らかである。この場での記憶に残る二三を述べる。

東亜連盟については先に記したが、事實は（マッカーサーは東亜連盟を非合法団体にして解散させたが、東亜連盟は単なる右翼団体ではない。米ソの二大勢力が凌ぎを削る現在ソ連の共産主義に堂々立ち向かうのは東亜連盟の理論と実践のみだ。

東亜連盟は民族闘争でなく民族協和、弱肉強食でなく共存共栄を主張しつつアジアの団結を図ろうと運動してきた。

力で屈服させる貴方がた欧米覇道主義とは異なり東洋古来の王道によって手を結ぼうと言う事だ。この度の裁判は覇道主義の最たるものだ。

勝者が敗者を裁くとは人間が犬、猫相手に裁判してるようなもので、否応無しに結果は出ている。

苟も世界平和を願う裁判ならば第一級戦犯は米国はトルーマン、ソ連はスターリン、イギリスはチャーチル、日本からは及ばずながら私が出よう。

そこで正々堂々論戦したらよいのだ。

既に負けてた日本の広島、長崎に原子爆弾を落としたのは国際法上大いに問題がありトルーマン大統領名の降伏勧告ビラでは人的資源に至るまで徹底的に壊滅するとあり、その通り東京、横浜等は無差別爆撃したのは、ソ連の参戦と同様紛れもない国際条約の違反である。

しかもソ連は今尚大多数の日本人を、自国に連衡酷使しているが、非人道の極みである。マルクスが地下で涙しているだろう。)

*今次戦争については、(君達は日本は侵略主義だと言うが、英米仏オランダ、ソ連等総て侵略の歴史ではないか、日本はこれら先輩の後追いである。

今次戦争で最も被害を受け最大の犠牲を払った中華民族の蒋介石総統は、終戦に際して{全国軍民及び世界人士に告ぐ}の告文を発表し、怨みに酬いるに徳を以てせよと言われ二百数十万に及ぶ日本軍将兵並びに在留邦人が無事、短期間で日本内地に送還された。

この言葉と行為こそ東洋道義であり、日本は戦わずして道義に於いて敗北していたのである。我々は欧米諸国に対しては非は非とし是は是として、堂々論戦すべきだが、中国を初めご迷惑を掛けた東亜諸民族には心から懺悔すべきです。

*東条との確執についての質問には、

(よく世間では東条と私が反目し合ってるように言うが普段は普通の付き合いです。しかし、主義主張となると別だ、私には一貫した主義主張があるが、彼にはなかったのではないか？此れでは反目し合う事など有るわけがない。彼は一貫した信念がなく右顧左眄して要らぬ猜疑心を持つから、戦局の対応も適宜でなかっただろう。)次いで重複するが東条の強権と雖も東亜連盟を紙切れ一片で解散させたマ司令部の絶大な権力には及ばない等と述べた。

*満州事変について(私は根っからの軍人で、戦の事についてはいささか自信があります。事変について言えば、当時の関東軍は不測の事態に備えて準備怠りない事は勿論だが、兵力、装備等圧倒的に優勢な張学良軍を相手に如何に有利に戦いをやるかは、周到緻密の作戦計画を練らねばならなかった。兵力で言えば二十対一だ到底勝ち目はないのだが僅か半年で一応の成果を挙げた。ナポレオン以上と自負している。)

*総ての面で劣弱な軍備での勝ちとは(常識的に勝てる道理が無いが、思うに戦いの勝敗は兵の多寡、装備の優劣よりも、蔣の統率と作戦宜しく、従う兵の訓練と団結が宜しければ、兵の多寡、装備の優劣問題でない。)以上心覚えを二、三書き留めた。

東京裁判全記録は「人類後史への出発」石原莞爾平和思想研究会編か、協和新聞バックナンバー自昭和三十五年九月至昭和三十六年八月間迄の一年間を参考にご一読を。

当時泣く子も黙るマッカーサー施政下で堂々所信を披瀝したのは石原莞爾唯一一人と思う。殊に宣誓口述書の最後に(軍官民の心なき徒輩がいろいろと申しましたが、満州国自体は全

く満州における歴史的所産であります。

民族協和の思想は、今後も長く残ることと確信いたします。) と結んである。

しかも、この確信は昭和二十四年八月十五日命脈尽きるまで変わる事がなかった。

その年の七月八日「新日本の進路」と題してマッカーサーに建白書を提出、八月十日に補足の説明書「全体主義に対する混迷を明らかにする」を提出占領政策の過ちを指摘した。この事は翌年アメリカ議会で発表され、元大統領フーヴァー氏主宰の有力誌上で一般に公開されている。マスコミに媚び踊る偽者が到底及ぶ処では無い。

智者は惑わず 仁者は憂えず 勇者は懼れず